テクストと生物
生物学と脱構築のあいだのジャック・デリダ

フランチェスコ・ヴィターレ
（イタリア・サレルノ大学）
（訳＝西山雄二・小川歩人）

1．切り開かれた道〔Via Rupta〕[1]——生–脱構築へ向かって

ジャック・デリダの最後のインタビュー『生きることを学ぶ、終に』は、死が差し迫るなかで、生の航跡についての彼の作品を振り返って読み返すように私たちを誘う。フッサールの「『幾何学の起源』序説」から、「いかなるときも生〔life〕を、不断に生き延び〔survival〕を肯定する」というその最後の言葉に至る、彼の作品を。

> この対談の最初からすでに指摘していたように、そして、現在私が置かれている生き残り［survivance］の経験以前から、私は、生き残りとは原初的な概念であり、私たちが生存と、こちらの方がよろしければ現存在〔Dasein〕と呼ぶものの構造そのものを構成するということを強調してきました。私たちは構造的に生き残りなのであり、痕跡の、遺言の、この構造の刻印を受けています。しかし、そのことを述べたうえで、生き残りはむしろ、生の側、将来の側よりも、死の側、過去の側にあるとする解釈に流されたくはありません。いい

[1]〔訳注〕Via Ruptaは下記の箇所でデリダが使用している表現。Jacques Derrida, *De la grammatologie*, Minuit, 1967, p. 158〔以下、DGと表記〕; *Of Grammatology*, translated by Gayatri Chakravorty Spivak, Johns Hopkins University Press, 1997, p. 107. 以下、OGと表記。〔『根源の彼方に——グラマトロジーについて』上巻、足立和浩訳、現代思潮社、1972年、220頁〕

え、いつでも脱構築は、〈然り〉の側、生の肯定の側にあります。私が――少なくとも、『歩み』（『海域』所収）以来――生／死の対立の複雑化としての生き残りについて述べてきたことは、私にあっては、生の無条件的肯定に発しています[2]。

この逆向きの道を辿って、私たちは主権性＝至高性に関係する動物と愚かさ、自己免疫と共同体と政治的なもの、生き延びと証言、ブランショと文学に出会う。しかし、最近つけられたようにみえるそれらの痕跡の意味を理解するために、私たちはもっと前に、脱構築のそのまさに最初のいくつかの歩みの中で、生命科学（古生物学、生態学、そしてまずもって生物学、進化論）とのある程度明白な対面を明るみに出す地点へと戻らなければならない。すなわち、たんに脱構築の諸問題の一つではなく、そのまさに母体として生の探索を理解し、生物の生の還元不可能で構造的な条件としての差延、そして、生命の地層化された有機体の構造としての痕跡あるいはテクストを思考する地点へと戻らねばならない。その最も基本的な諸形式から人間の心的システムの有機的構成、また、私たちの文化的環境において生命と諸制度を構造化する理念的客観性の形成に至る地点にまで、戻らねばならない。

私の目的は、生脱構築〔*Biodeconstruction*〕という暫定的なタイトルの作業を通じた仮説を、とりわけ、デリダによって1975年におこなわれた未公刊の「生死」講義の読解を明らかにすることによって証明することである[3]。

---

[2] Jacques Derrida, *Apprendre à vivre enfin. Entretien avec Jean Birnbaum*, Galilée, 2005, pp. 54-55 ; *Learning to Live Finally. The Last Interview*, translated by Pascale-Anne Brault and Michael Nass, Palgrave Macmillan, 2010, p. 51.〔『生き残ることを学ぶ、終に』、鵜飼哲訳、みすず書房、2005年、63-65頁〕

[3] この仕事の出発点は、フランス、カーンのIMECのデリダ・アルシーヴに所蔵されている未公刊の「生死」講義の読解である。この読解について、私はロドルフ・ガシェによって企画されたJust Theoryシリーズにおいて、ニューヨーク州立大学バッファロー校でセミナーを行った。このセミナーは部分的に以下の論文で公表された。« Via rupta: vers la biodéconstruction » in *Appels de Jacques Derrida*, edited by Danielle Cohen-Lévinas and Ginette Michaud, Hermann, 2014. ここで私はその時のセミナーをより洗練させた形で提示している。デリダの講義の部分的出版、翻訳を許可してくれたマルグリット・デリダ氏に感謝する。

まず、私たちは少し後ずさりして、原エクリチュールの概念の発生へと、つまり、「『幾何学の起源』序説」[4] へと向かわねばならない。

周知の通り、デリダは『声と現象』においてフッサールの「生き生きした現在」の脱構築の諸帰結を説明し、最終的にフッサールが現象学の「諸原理の原理」と呼ぶものから解放されたものとしての過去把持の（また、記憶の構成の）ダイナミクスを再構成するために、原エクリチュールの概念を導入した。しかし、「序説」において、すでにデリダは、その批判的な閾、すなわち、フッサールの『幾何学の起源』の発生的観点から、理念的諸対象の構成の諸条件を記述するためにエクリチュールに訴える必然性を定義することによって、脱構築の作業のための土台を準備していた。フッサールにとって、エクリチュールの可能性のみが理念的諸対象の保存と伝達を保証するものだった。というのも、書かれた記号はそれらが参照する生き生きした現在に直接的な関係をもっておらず、またそれらの疑わしい、本源的な生産の顕在的な現在に依存していないからである。デリダにとって、エクリチュールの構造的ダイナミクスは、たんに理念的諸対象の保存と伝達に関するだけでなく、より根底的に、意識一般にとっての意味一般の可能性に関するものである。すなわち、個人の意識における経験の痕跡の把持は、すでに直観の直接的な生き生きした現在、意識それ自身からの還元不可能な隔離に影響されているのである。というのも、この隔離のみが、その疑わしき「生き生きした現在」、すなわち本源的生産とは絶対的に他なるものである、来たるべき指示としての痕跡の承認を保証するからである[5]。たしかに、「序説」において、デリダはすでに再把持に関わる痕跡の還元不能な条件としての反覆可能性の法則、つまり意味一般の法則を発見し、形式化していた。したがって、文字以前のエクリチュールを通して自らを構成する意識にとって、「生き生きした現在」などはないのだ。そして、まさしくこれ

[4] Jacques Derrida, *L'origine de la géométrie d'Edmund Husserl, Introduction et traduction*, PUF, 1962〔以下、ODGと表記〕; *Edmund Husserl's Origin of Geometry. An Introduction*, translated by John P. Leavey Jr., University of Nebraska Press, 1989. 以下、IOGと表記。〔エトムント・フッサール、ジャック・デリダ、『幾何学の起源』、田島節夫ほか訳、青土社、2014年〕原エクリチュールについては以下の私の論文を参照していただきたい。S. Facioni, S. Regazzoni, F. Vitale, *Derridario. Dizionario della decostruzione*, Il nuovo Melangolo, 2012, pp. 15–28.

らの理由によって、デリダはエクリチュールを後に「原エクリチュール」と呼んだのである。

以上のようなことはよく知られているし、むしろ知られているべきである。しかし、「序説」の中のある一節、それはおそらくあまり知られていないし、いまだに私たちの観点から見て、決定的なものである。それは、フッサールがすでに構成された意識のためにそれ自身を証明しようとする現象学のまさに限界を侵犯しなければならなかったために、文字以前のエクリチュールとしての把持へと歩を進めることができなかったとデリダが主張している注である。

> 受動的な過去把持から想起あるいは再想起の能動性へのこの移行、すなわち理念性および純粋な客観性をそのものとして「産出し」、そして別の絶対的起源そのものとして出現させる移行を、フッサールはつねに、すでに与えられている本質的可能性として、その源泉が問題化されない構造的能力として記述している。その源泉は現象学そのものの可能性と合致するのであるから、おそらく、現象学によって問題化されないであろう。この移行は、その「事実性」において、〈自然〉及び生の下位形態から意識への移行でもある。それはおそらくまた、今日、ひとが「乗り越え〔overcome〕」と呼んでいるものを主題化する場でもある。この移行において現象学は解釈的哲学へと「乗り越えられ」、そこで完成させられるであろう[6]。

---

[5] ODG, pp. 81-82/IOG, p. 85.〔同前、120-121頁〕「「同じもの」の再認と伝達は、多数の個人の間でなされる以前に、個人的意識の内部でなされている。意味は生き生きとした束の間の明証の後に、有限的かつ受動的過去把持の消滅の後に、想起の能動性のうちで「同じもの」として再産出されうる。それは無へとつれもどされるのではない。理念性がそのものとして一般に自我論的主観のうちで告知されるのはこの同一性の回復においてである。(……) かくして意味は他の主観にとってそうである以前に、同じ主観の別の契機にとって同一な対象の理念性なのである。したがって、相互主観性とはまず、ある仕方で、私と私、私の顕在的な現在ともろもろの他の現在そのもの、すなわち他のものとしての、そして現在としての (過ぎ去った現在としての) それら、ひとつの絶対的な起源と、その根底的な他性にも拘らずつねに私のものである別なもろもろの絶対的な起源との非経験的な関係である、同じ事象が絶対的に他なる諸瞬間と諸作用を通じて考えうるのはこの根源的な絶対者の循環のおかげである。」

原エクリチュールとしての把持の発生と構造を理解するために、現象学の限界より以前に、すでに構成された意識より以前に遡ろうとすることは必然である。すなわち、意識の生成へ向かい、自然に焦点をあて、そして意識それ自体が創発するという生物学的条件へ焦点をあてる地点の方へ現象学的探求をおこなうことは必然なのである。事実、「この移行は〈自然〉および生の下位形態から意識への移行でもある」のだ。

この意識の自然的かつ生物学的な発生の探求の諸痕跡は『グラマトロジーについて』と「フロイトとエクリチュールの舞台」においてすでに明らかである。

2．原ーエクリチュールの生物学的発生

『グラマトロジーについて』は「エクリチュール」という語の使用に際したある種のインフレーションを強調することから始まっている。「エクリチュール」は知のあらゆる領域だけでなく、芸術、政治、軍事戦略、スポーツの言説においても使用されているのだ。「これらすべては、たんにこれらの活動に二次的に関連している記入法のシステムを記述するためだけでなく、これらの活動そのものの本質と内容を記述するためである」[7]。とりわけ、デリダの観察によれば、説明的モデルとしてエクリチュールに頼ることが二つの特定の領域において特筆すべき諸帰結を生んでいる。これらの帰結はきわめて注目すべきものであり、私たちはそこに来たるべき、あるいはむしろすでに作動している脱構築のしるしの数々を見出すことができる。

> また、まさにこの意味において、今日生物学者は生きた細胞内の情報の最も基本的な過程に関して、エクリチュールとプログラムを語るのである。結局、本質的諸限界をもとうともつまいと、サイバネティクス的プログラムにおおわれたあらゆる領域は、エクリチュールの領域であるだろう。サイバネティクスの理論は、かつて機械と人間を対立させる役割を果たしてきたあらゆる形而上

---

[6] ODG, p. 82/IOG, p. 86. 英訳を一部変更。〔同前、127-128頁〕

[7] DG, p. 19/ OG, p. 9.〔『根源の彼方に――グラマトロジーについて』前掲上巻、27頁〕

学的概念――魂、生命、価値、選択、記憶の概念にいたるまで――を自身から放逐しうると仮定しても、自身の歴史＝形而上学的所属が同様に告発されるに至るまで、エクリチュール、痕跡、グラムあるいは文字素〔graphème〕の概念を保有せざるをえないであろう。まさに人間的と規定される（つねに人間に与えられてきたすべての明白な性格、それらが内含する諸々の意味作用の全体系を備えて）あるいは無－人間的な〔an-human〕と規定される以前に、グラム――あるいは文字素――は、そのような風に境位〔élement〕を指定するであろう。単純性なき境位。それは環境と考えられようと、〈原－綜合〉〔archi-synthèse〕一般の境位であって、形而上学の諸対立の体系の内部で定義されるべきではないようなものの境位、したがって、まさに経験一般つまり意味一般の根源とさえ呼ばれてはならないようなものの境位なのだ[8]。

したがって、生物学とサイバネティクスは、エクリチュール、痕跡、そしてとりわけ、グラムの概念への依拠が、当時、西洋的思考、すなわち、現前の形而上学を構造化する階層化された諸対立のシステムにおいて最も根底的な動揺の数々を引き起こしていた科学なのである。

デリダは、サイバネティクスの産みの親の一人であるノーバート・ウィーナーを参照し、関係する注で言及している。しかし、デリダにとって、ウィーナーは、生命の領域から持ち込まれた諸概念の素朴な使用が示唆するように、いまだ形而上学の囚人である。

周知の如く、ウィーナーは、生物と無生物などとの間の、彼によればあまりにも一般的な対立は「意味論」に任せておきながら、にもかかわらず、機械の諸部分を名付けるのに相変わらず「感覚器官」「運動器官」等々の表現を用いている[9]。

グラムの根底的な影響を把握するために、私たちはむしろ生物学の領域において

---

[8] DG, pp. 19-22/OG, p. 9.〔同前、27-28頁〕

[9] DG, p. 19/OG, p. 324.〔同前、30頁〕

起こっていることに目を向けるべきである。そこではサイバネティクスによって導入された諸々の概念が生物の組織化の最も原初的な諸過程を理解し、説明することを可能にしているのだ。このような視点から、私たちはデリダが後に差延と呼んだ原－綜合の構造において、生命の基本的な過程の構造的条件、つまり意味一般の起源さえみとめることができたのだ[10]。

したがって、生物学とサイバネティクスを同時に描写することは決して偶然ではない。明らかにデリダは、サイバネティクスの貢献が遺伝学そして生命諸科学一般において引き起こした革命に気づいていた。とりわけ、デリダはちょうど1965年に薬学のノーベル賞を受賞したジャック・モノー、フランソワ・ジャコブそしてアンドレ・ルヴォフの仕事に気づいていたように思われる。おそらく、デリダは同年のロワイヨモンで催された会議の予稿集を読んでいた。「現代科学における情報の概念」にはサイバネティクスの父であるウィーナーや〔アブラハム・〕モールスだけでなく、ルヴォフとデリダの指導教員であったジャン・イポリットもまた参加していたのである[11]。ルヴォフの論文「分子生物学における情報の概念」のなかで、彼は明らかに生物の発生と構造についての説明のために、隠喩としてのエクリチュールやテクストに依拠している[12]。それらの予稿についてのデリダの関心を立証することはきわめて興味深いだろう。というのも、デリダは、私たちがこれからみるように、基本的にジャコブの『生物の論理』（1970年）の読解に捧げられている「生死」講義の冒頭部分で、驚くべき、計算不可能な関連にある諸効果とそれらの隠喩の数々を再び取り上げているからだ[13]。

しかし、『グラマトロジーについて』において、デリダは総括的な参照先として、サイバネティクスと生命諸科学の関連に頼っているだけではない。サイバネティクスと生命諸科学は、まさにグラムの発生、より正確には、原－エクリチュールの発

---

[10] 「原－綜合」としての差延の概念については、ロドルフ・ガシェの『鏡の裏箔』をみよ。Rodolphe Gasché, *Jacques Derrida and the Philosophy of Reflection*, Harvard University Press, 1986, pp. 177–251.

[11] Cf. ‘Cahiers de Royaumont’, Philosophie N° V, *Le concept d’information dans la science contemporaine*, Minuit, 1965. 以下、CISと表記。

[12] Cf. André Lwoff, ‘Le concept d’information dans la biologie moléculaire’, in CIS, pp. 173–202.

生の時点で登場するのだ。この場合、その参照項は明らかである。それはアンドレ・ルロワ＝グーランの『身振りと言葉』だ。『身振りと言葉』は、デリダにとって、後に『グラマトロジーについて』へと発展していく1965年の12月と1966年の１月の「クリティク」誌に発表された二つの論文のきっかけとなるものであった[14]。

『身振りと言語』の二巻本の中で、ルロワ＝グーランは人間とその古い祖先たちの動物学的、また解剖学的、神経心理学的な構造から出発しながら、古生物学の諸々の成果を基盤とした進化論者の視点から人間の冒険を再構成している。この視点からすると、ホモ・サピエンスとは、頭蓋穹窿を徐々に解放し、次いで、人間の脳に特有の発達の原因となった直立姿勢をその祖先に身につけるように導いた進化の帰結なのである。私たちの脳の複雑性は、実際には、（たとえもしそれが本質ではなく、程度の差異だとしても）他の高等動物たちから私たちを区別するただたんに種的な特徴にすぎないのである。

とりわけ、ルロワ＝グーランは、ホモ・サピエンスの出現の最初の諸根拠と私たちの時代から三万年前に遡って「意図的な反復をかたどっている」[15]エクリチュールの最初の諸痕跡（グラフィ〔*graphie*〕）とを関連づけている。それらは明白な象徴的参照を剥奪された規則的な彫り込みであるが、そこにおいて、二万年後に初めて現れることとなる慣習的なエクリチュールの諸形式をも特徴付ける反覆可能性〔iterability〕の機能的構造を認めることができるのである。したがって、その限定的な意味におけるエクリチュールの構造的可能性は、ホモ・サピエンスの夜明けから解放されていたのである。これらのすべては、私が別の場所で議論した様々な理

---

[13] Cf. François Jacob, *La Logique du vivant, une histoire de l' hérédité*, Gallimard, 1970〔以下、LVと表記〕; *The Logic of Life. An History of Heredity*, trans. by Betty E. Spillmann, Pantheon Books, 1973. 以下、LLと表記。〔『生命の論理』、島原武・松井喜三訳、みすず書房、1977年〕

[14] デリダはテクストに先立つ「緒言」の最初の中においてこの点を喚起している。Cf. DG, p. 7/OG, p. 323.〔『根源の彼方に――グラマトロジーについて』前掲上巻、12頁〕Cf. André Leroi-Gourhan, *Le Geste et la Parole*, 1. : *Technique et langage*, 2. : *Mémoire et les Rythmes*, Paris, Albin Michel, 1964-1965〔以下、GP1, GP2と表記〕; *Gesture and Speech*, translated by Anna Bostock Berger, MIT Press, 1993. 以下、GSと表記。〔『身振りと言葉』、荒木亨訳、ちくま学芸文庫、2012年〕

[15] GP2, p. 217/GS, p. 370.〔同前、575頁〕

由からすれば、デリダにとって明らかに決定的なものである[16]。ここで、まさにこの文脈において書き記された『グラマトロジーについて』の重要なくだりのうち、ルロワ＝グーランへの参照を強調させていただく。

> だからA・ルロワ＝グーランは、人間の統一性と人間的出来事とを表記法〔the *graphie*〕一般のたんなる可能性によって記述することはもはやしないのである。むしろ生命の――この場合私たちが差延作用と呼ぶものの――歴史における一段階あるいは一分節として、グラムの歴史として、記述するのだ。人間と他の生物とを区別するのに普通用いられている諸概念（本能と知性、パロール、社会、経済などの不在や現前、等々）に頼る代わりに、ここではプログラムの概念が要請される。たしかにそれはサイバネティクス的意味で理解されねばならないが、しかし、サイバネティクスはそれ自身、未来予示と過去把持との二重の運動の統一としての痕跡の諸可能性から出発してでなければ、理解可能ではない。この運動は、「志向的意識」の諸可能性からは遥かにはみ出してしまう。この意識は一つの現出であって、グラムそのものとして（つまり非－現前という新たな構造に従って）現われさせ、疑いもなく、狭義のエクリチュールの諸体系の出現を可能にするものである。「発生的記入」や「プログラム的な短い連鎖」がアメーバや環形動物の行動を規整して、遂にはアルファベット文字〔writing〕を越えてロゴスの秩序、また或るホモサピエンスの秩序への移行にいたるまで規整するようになると、グラムの可能性は、厳密に根源的な水準、型、リズムに従って自身の歴史の運動を構造化する。だがそれらは、最も一般的なグラム概念なしには考えられない。この概念は還元不能であ

[16] 反覆可能な痕跡、そして、空間－時間性の前－文化的経験の前－歴史的な発生についてのルロワ=グーランへのデリダの言及については、拙論 'Via rupta: vers la biodeconstruction' を参照されたい。ルロワ=グーランによって、エクリチュール（グラフィ）の最初の証拠の数々からその限定された意味におけるエクリチュールにいたる進化論的段階を記述するために洗練された「神話文字〔mytho-graphy〕（いわゆる多次元的な象徴的エクリチュール）の概念へのデリダの依拠のために、私は神話文字〔*Mitographie*〕を参照する。*Jacques Derrida e la scrittura dello spazio*, Milano, Mimesis, 2012.〔Cf. DG, p. 127/OG, p. 85/『根源の彼方に――グラマトロジーについて』前掲上巻、177頁）

り、把握不能である。A・ルロワ＝グーランが敢えて用いた表現を受け入れるなら、私たちは「記憶の解放」について、また痕跡の、いつもすでに始まってはいるがいつもよりいっそう大きい外面化について、語ることができよう。この外面化は、いわゆる「本能的」行動の基本的プログラムから電子的分類索引、翻訳機械の構成にいたるまで、差延と保蔵化の可能性とを拡大する。この可能性は、同じ運動において、いわゆる意識的主観性、そのロゴス、その神学的諸属性を構成すると同時に抹消するのである[17]。

私たちはこのテクストを一語一語再読すべきである。指摘しておくと、デリダはたんに、ルロワ＝グーランのおかげで、その限定的な意味において、しかし、そのきわめて広大な歴史のなかで、前史のホモ・サピエンスの誕生にその起源を見出すエクリチュールの出現を記述することが可能であると述べたわけではない。グラムという概念によって、私たちは後の歴史をさらに広大な歴史の中に書き込むことができる。それは生命それ自身の歴史であり、いわば、生存法則によって統治される生命一般の進化である。したがって、グラムは、生命とその進化の最も一般的な構造を私たちに理解させてくれるだろう。その限定的な意味におけるエクリチュールは生命とその進化の一つの契機でしかないのだ。まずもって、そしてこれは私たちにさらに興味を抱かせるものだが、グラムのおかげで、私たちは、差延が生物の生命とその進化の一つの遺伝－構造的条件であると指摘できるだろう。

この視点から、まず私たちはデリダがルロワ＝グーランを参照する文脈を心に留めておくべきだ。ある注で、デリダは『身振りと言葉』について、特に、第二巻「記憶とリズム」[18]の口火を切る第二部についていくらかの書誌的な参照をおこなっている。「記憶の解放」と題された第一章において、ルロワ＝グーランは本能と知性の間の対立からあらゆる根拠を剥奪することによって、人間と動物との間の伝統的な哲学的対立を脱構築している。振る舞いをとりしきる有機的、神経心理学的な諸構造を考慮に入れると、人間と動物の間には対立はなく、ただ程度の差異のみがあるのだ。この差異は神経システムと人間を含んだ動物の脳の複雑さの度合いの尺度と

---

[17] DG, p. 125/OG, p. 84. 英訳を一部変更。〔前掲上巻、175-176頁〕

[18] GP2, pp. 9-34/GS, p. 219-236.〔『身振りと言葉』前掲、348-375頁〕

なる。

この点において、ウィーナーのサイバネティクスが登場する。サイバネティクスの領野において洗練されたプログラムの概念への明白な依拠によって、ルロワ＝グーランは動物の神経システムと脳の機能を諸機械の機能と比較する。「もっと正確にいえば、神経系は本能をつくりだすはずの機械ではなく、プログラムをつくりながら内外の誘因に対応する機械なのである」[19]。サイバネティクスにおいて、一つのプログラムは一つの機械に書き込まれた諸々の指示が順序づけられたシークエンスである。そして、この機械によって、プログラムは外部への諸効果とともに受信した情報に応答することができる。動物にとって、このプログラムは、神経システムに書き込まれた遺伝－遺産相続的、遺伝子的な諸々の指示の全体である。この程度の差異は、このプログラムの大なり小なりの柔軟性、応答に際した可能な諸変異への大なり小なりの開かれ、つまり、個体における環境と集団の影響によって素描される可能な諸選択を統合する能力に依存する。しかし、これらの可能性は、究極的には、プログラムの構造に書き込まれている。ルロワ＝グーランとデリダがともに言及するように、環形動物やアメーバにおいて、そのプログラムと作動は、神経システムの極端な単純さによって、きわめて限定されている。人間においては、他の動物たちの脳と比べて、非常に多くの結合を扱うことができる神経システムと脳の高い複雑性によって、プログラムがきわめて開かれている（その能力は、直立姿勢の想定による頭蓋の前頭葉の解放の度合いに依存するためまったく例外的なものではない。直立二足歩行は生存の進化論的法則によって素描されたある諸条件によって説明されうるのだ）。

いまや、デリダがルロワ＝グーランへ言及したくだりに戻ることで、私たちは以下のように主張することができる。つまり、サイバネティクスという様式を通してルロワ＝グーランによって洗練されたように、デリダにとって、生きている動物の振る舞いの進化論的構造の記述は、その還元不可能な条件としての原－エクリチュールの構造を必然的に含意しているのだ。また、このことから私たちは、生きている動物から、もっと言うならば、構成された志向的意識からの原－エクリチュールの発生を認めることができるのである。もし、生きている動物の生が、ル

[19] GP2, p. 13/ GS, p. 221.〔原文ではGS, p. 260とあるが誤りと思われる〕〔同前、352頁〕

ロワ＝グーランによって記述された用語にしたがって、環境との相互作用に依存しているのであれば、それは反覆可能な諸痕跡を洗練させる可能性に統御されている。つまり、人間と動物たちの対立に先立って、動物一般は把持と予示の構造を十分もっていなければならない、つまり、記憶をもつことができなければならないのである。ルロワ＝グーランにならって、デリダは以下のように言うことができる。すなわち、現象学によって記述された志向的意識は、生存の必然性に応答することをプログラムされた生物の一般的構造の特殊な出現でしかない。したがって、原－エクリチュールは動物的生において、そして、食料源、生殖相手、諸々の危険を認知する必要性において、すでに重要になっているのである。

たしかに、ルロワ＝グーランはすでに、私たちをこれらの結論へ導いている。『身振りと言葉』において、ほとんど文字通りに、原－エクリチュールの概念を予期するように思われる記憶の概念の延長を提示しているのだ。

> 「記憶」という言葉は、この本の中で非常に拡大された意味で用いられている。それは知性の一特質でなく、何であれそのうえに行為の鎖が登録される支えである。この点から動物的種の行動の一定性を定義するための「種の記憶」、人間社会の行動の再生を保証する「民族的」記憶、そして同じ意味で一番最近の形ではエレクトロニクス的な「人工的」記憶を考えることができる。人工的記憶は本能や反省の助けを借りずに連鎖的な機械的行為の再生を保証する[20]。

明らかに、書き込みの支持体としての、また反覆可能な痕跡の原因、そして同時にその結果としての記憶はデリダによる発明ではない。とにかく、記憶の可能性の条件としての原－エクリチュールの概念の延長を、（エクリチュールの様々な諸装置を通じた記憶の外面化と技術的進化と同様に、記憶の動物的、前－文化的な発生という視点から）ルロワ＝グーランが提起した記憶に関する延長へと遡って調べることは可能なのだ。

『グラマトロジーについて』の中で、デリダは以下のように書いている。

---

[20] GP2, p. 267/GS, p. 238.〔原文ではGS, p. 417とあるが誤りだと思われる〕〔同前、642頁〕

> 自然と文化、動物性と人間性、等々の対立以前に考えねばならぬ痕跡、「記憶」の原－現象が意味作用の運動そのものに属しているとすれば、意味作用は、人が記入しようとしまいと、「外的」と呼ばれる「感覚的」「空間的」な境位の中に何らかの形でア・プリオリに書かれていることになる。原－エクリチュールの、パロールの、次いで狭義の「文字標記〔the *graphie*〕」の、最初の可能性であり、プラトンからソシュールに至るまで告発されてきた「簒奪〔usurpation〕」の誕生の場であるこの痕跡は、最初の外面性一般の開始であり、生きているものとその他者との、内部と外部との、謎めいた関係、つまり間隔化＝空間化〔spacing〕である。私たちが世界の中で最も親密なものとして、親密性そのものとして知っていると信じ込んでいる外部、「空間的」「対象的」な外面性は、グラム、時間化としての差延、現在の意味の中に書き留められた他者の非－現前、生きた現在の具体的構造としての死への関係なしにはあらわれないであろう[21]。

この点において、生きている動物の生の可能性の構造的条件としての原－エクリチュールを思考することは必須である。その発生が進化の諸法則、究極的には、環境中の生存法則に応答するものである。

ゆえに、おそらく、私たちは1966年のテクスト「フロイトとエクリチュールの舞台」の以下のような謎めいた一節をよりよく理解できるだろう。このテクストは、決して諸々の生命科学に関わることをやめなかったフロイトによって創始されたパースペクティヴの下で、記憶の構成の条件、すなわち、意識の構成の条件をなす把持の構造――例えば、保留――に焦点を当てている。

> 痕跡の産出における、こうした差異のすべてを、差延の諸契機として改めて解釈することができる。フロイトの思想をこの後ずっと支配することになるモチーフに従うなら、この運動は、危険な備給［investissement］を延期すること〔deferring〕によって、つまり、保留〔Vorrat〕を作り出すことによって、自分自身を守る生の努力として記述される。脅威となる消費や現前は、通道

[21] DG, p. 103/OG, pp. 70-71.〔『根源の彼方に――グラマトロジーについて』前掲上巻、143頁〕

［frayage］ないし反覆の手を借りて延期されるのである。すでにこれは、快感と現実の関係を創始する迂回〔Aufschub〕ではないだろうか。すでにして、これは生の起源にある死ではなかろうか。生は自分を守るためには、死のエコノミーや、差延や反復や、保留に頼らざるをえない[22]。

したがって、デリダにとって、痕跡と原－エクリチュールの発生は生存法則によって条件づけられている。デリダの作品のなかでこれらの概念が決定的な役割を担っているとすれば、重大な諸帰結へ導く一筋の道が開かれている。しかし、私はこの点に手間取っているつもりはない。むしろ、これらの道筋のなかに、デリダが後年、「思弁する――フロイトについて」において洗練させた読解のプログラムが認められることに注目してみたい[23]。このテクストは1975年におこなわれた「生死」講義の最終部分が元となったものである。このプログラムはすでに「フロイトとエクリチュールの舞台」のもう一つの、おそらくより謎めいたくだりのなかで、より明確な方法で確立されていたように思われる。

おそらく、生は反復によって、痕跡によって、差延（遅れ）によって、みずからを守る。しかし、このような言い方には注意が必要だ。なぜなら、まず初めに現前的な生があって、その後でその現前的な生が差延のなかでみずからを守り、みずからを先送りし、みずからを保留することになるのではないからだ。差延が生の本質を構成しているのである。あるいはむしろ、差延は一個の本質ではなく何ものでもないのだから、仮に存在がウーシア〔実体〕として、

---

[22] Jacques Derrida, 'Freud et la scene de l'ecriture', *L'écriture et la différence*, Seuil, 1967, pp. 300-301〔以下、EDと表記〕; 'Freud and the Scene of Writing', *Writing and Difference*, translated by Alan Bass, Routledge, 2001, p. 253. 以下、引用はFWで示す。〔『エクリチュールと差異』、合田正人訳、法政大学出版、2013年、409頁〕

[23] Jacques Derrida, 'Spéculer - sur "Freud"', *La carte postale – de Socrate à Freud et au-delà*, Flammarion, 1980; 'To Speculate – on Freud', *The Postcard. From Socrate to Freud and Beyond*, translated by Alan Bass, The University of Chicago Press, 1987.〔「思弁＝投機する――フロイトについて／超えて」、大西雅一郎訳（冒頭部分の抄訳）、『別冊 水声通信――セクシュアリティ』、水声社、2012年〕

> 現前として、本質／実存として、実体ないし主体として規定されるならば、差延は生ではない。存在を現前として規定する前に、生を痕跡として志向する必要がある。これこそ、生とは死「である」と言うことが可能になるための、そして、反復と快感原則の彼岸が起源的なものであり、それらによって踏みにじられるものそれ自体に先天的に備わるものだということが可能になるための唯一の条件である[24]。

したがって、痕跡を産出する構造的条件としての差延は、たんに生命――環境内のその生存は差延によって調整される――の個別的形式の組織化と進化に関わるだけではなく、まさしく動物と一匹の動物としての人間の組織化と進化に関係するのである。差延は生命それ自体の可能性の条件である。しかし、差延をこれらの用語で理解しながら、生命の概念が従属している現前の価値を基盤とした階層的な諸対立のシステムに先立つところに戻らなければならない。たしかに、こうした注意は表面的な反論からデリダのテーゼを守るには不十分であるかもしれない。この反論によれば、すなわち生命一般の可能性の条件としての差延は、たんにあらゆるものを説明することができる他の形而上学的な原理にすぎない、つまり、超越論的意味の地位を占めようとするものであり、単なる思弁的抽象でしかない、というわけだ。つまりは、私たちはきわめて野心的であると同時に危険であるように思われるデリダのテーゼの重大さと射程を証明しなければならないのである。そのために、私はこのテーゼを生命諸科学へと向かい合わせることで試練にかけてみたい。

これが「生死〔*La vie la mort*〕」に捧げられたセミネールの中でデリダがおこなおうとしたことである。したがって、そのプログラムは、『グラマトロジーについて』の中で告知されていないとしても、すでに「フロイトとエクリチュールの舞台」の先に引用したくだりの中に告知されているように思われるのだ。

---

[24] ED, p. 302/FW, p. 254.〔『エクリチュールと差異』前掲、411頁〕

３．生命とはテクストである

私たちはこの「生死」講義の発展の全体を辿ってみなければならない。手始めに、ヘーゲルの『大論理学』における生命の三段論法の批判的な説明へ向けられた「序」から始めてみよう。デリダは『大論理学』のなかに、現代生物学の軽視され誤解されている遺産を見定めているようである。この遺産は、フランソワ・ジャコブの『生命の論理』にしたがえば、あらゆる形而上学的―哲学的な前提から解放されることを求めているのである。デリダの著作の解釈に関係して達成された諸帰結やその決定的な含意という観点からすれば、この講義の最大の、そして、徹底的かつ適切な分析はジャコブのテクストに捧げられている。

より詳細な分析は差し控えておき、私はここで最も注目に値する諸段階を短くまとめるだけにとどめておこう。『生物の論理』において、ジャコブは生物学の歴史を再考している。すなわち、遺伝的な遺産〔genetic heritage〕のメカニズムの理解をうながし、細胞――すなわち、生物、生けるものすべての生命の基本的な単位――の生産においてDNAが果たす本質的な役割の発見を導いた生物学の歴史を再考している。この発見によって、生物学は生物の生命を統御する論理、いわば、自己－再生産の論理を進化論の枠組みにおいて洗練させることができた。この論理は最終的に、生物の構造と組織化を特徴付ける目的論をあらゆる形而上学的な含意――それが盲目で自己言及的である限りにおいて――から解放しただろう。

サイバネティクスによって洗練され組織化された諸システムの理論は、こうした論理の発見に本質的な貢献をなした。また、ジャコブはルロワ＝グーランのようにウィーナーに言及し、諸々の機械と生物の諸形式のアナロジーを想起しているが、彼はさらにその先へ赴く。すなわち、サイバネティクスはたんに環境との関係においてすでに組織化されている動物たちの振る舞いだけでなく、遺伝的な相続〔genetic heredity〕のメカニズム、そして、生物の機能を統御する最も基本的な諸法則へも適用できるのである。

> 遺伝はある世代から次の世代への繰り返されるメッセージの運び手となる。生産されるべき諸構造の諸々のプログラムは卵の核に記録される。(……)シュレディンガーが付け加えるように、少しのパターンで十分である。モール

ス信号における二つの信号の組み合わせは、コード化されるあらゆるテクストを可能にする。組織化の計画は化学的な諸々の象徴の組み合わせのシステムによってマッピングされる。遺伝は一つのコンピュータの記憶のように機能するのだ[25]。

そのモチーフあるいは分離した特徴は、分子構造を構成する四つの要素である。

それ〔遺伝子の分子構造〕は、一つのテクストの中のアルファベットの文字群のように、数えきれないほど反復され、鎖に沿って並べ替えられた四つの下位単位、四つの有機的基盤の直線によって形成される一つの長い重合体である。タンパク質の中の二十の下位単位の順序を方向付けるのは、これらの四つの下位単位の順序である。それゆえ、あらゆるものが、遺伝物質に含まれる連続を分子構造、つまり細胞の諸特性を指定する指示の列であるとみなすように、また有機体の計画を世代から世代へと移送されるメッセージであると考えるように導くのだ[26]。

ここで私たちはデリダが関心を寄せていたであろうものがみえてくる。登録と伝達、把持と予示のシステム、いわば、本源的な原－エクリチュールの一種という点で洗練されたテクストとして、DNAは生物の諸機能の論理を調整するのである。これは単なる隠喩ではない。遺伝的メッセージの意味はその疑わしい内容によるのではなく、諸要素の組み合わせの順序によるのであり、その順序は細胞内の諸相互作用のシークエンスを生産するのである。おのずから解釈されるあらゆる要素は、ちょうどアルファベットの文字がそれ自体で意味をもたないように、いかなる効果も生産しない。いくつかの明白な理由のために、デリダは生きたテクスト〔living text〕の洗練化に際して、記号論的秩序に対して統語論的秩序の優位を強調することになるが[27]、しかし、この点において、デリダはジャコブから距離をとるわけでも、自論を強要しているわけでもない。実際、ジャコブにとって、遺伝的メッセー

[25] LV, p. 274/LL, p. 254.〔『生命の論理』前掲、250頁。翻訳は訳者〕
[26] LV, pp. 284-285/LL, p. 264.〔同前、260頁。翻訳は訳者〕

ジの洗練化はテクストの洗練化に基づいており、他方で、遺伝的メッセージの伝達はその解釈、あるいはむしろ、別のテクストへの翻訳に基づくのである。

> 遺伝についての私たちの知識を最も良く記述するモデルは、たしかに、化学的メッセージのモデルである。中国語のような象形文字で書かれたメッセージではなく、モールス信号のそれのようなアルファベットで書かれたものである。センテンスがテクストの断片を表象するように、遺伝子は核酸の断片に対応する。両方の場合において、孤立化した象徴は何も意味しない。ただ諸象徴の組み合わせのみがいくらかの「意味」をもつ。両方の場合において、与えられた連続、センテンス、遺伝子は特別な「句読法」とともにしるしを開始し、終わらせる。核酸の連続からタンパク質のシークエンスへの変換は、たとえば英語に翻訳されるまでは理解できないモールス信号における受けとられたメッセージの翻訳のようなものである。これは、二つの「アルファベット」の間の諸記号の等価物を提供する「コード」によってなされる[28]。

デリダにとって、ジャコブが生物の論理〔the logic of the living〕を記述するモデルとしてテクストに依拠することは偶然ではない。生物の本性、そして、遺伝的メッセージの構造の本性そのもののために、テクストはその再生産つまり生命を可能にする登録と伝達を自らに強いるのである。さらに、デリダからすれば、このテクスト的構造の必然性によって、私たちは、生物学がサイバネティクスから導入した用語以上に厳密な用語で生物の論理を説明することができる。またしたがって、「メッセージ」や「コミュニケーション」という概念を素朴に使用する際にいまだに維持されている形而上学的な残滓から、生物学それ自体を解放することができるのだ。

---

[27] デリダが総合的下部構造を洗練化するにあたって、記号論的次元に対する統語論的次元の卓越を示したことについては、Rodolph Gasché, *Jacques Derrida and the Philosophy of Reflection, op. cit.*, pp. 239-251 を参照。

[28] LV, pp. 295-296/LL, p. 275.〔『生命の論理』前掲、271頁、翻訳は訳者〕

最初の出来事、実際の起源、等々が一つのテクストであり、テクストとしての構造をもっているとき、この空想的な冒険はつねにそれ自身を再生産しうる。生物がテクストとしての構造をもっているならば、これこそが生物に起こっていることである。わたしはテクストと言い、パロールとも、非テクスト的音声言語とも言わない。言うまでもなく、遺伝的テクストは音声的ではなく、非音声的であるが、それは私がここで強調しようとしている点ではない。(……) そして、こういうわけでテクストの概念は生命科学にとって不可欠である。音声言語の概念と比べて——遺伝的プログラムには声も語もないのだから言うまでもないことだが——、それ以上に不可欠であるだけでなく、メッセージ、情報、コミュニケーションの概念と比べて——ジャコブや他の生物学者たちにとっては言うまでもないことだが——、それ以上に不可欠なのである。もちろん、メッセージ、情報、コミュニケーションの諸々の効果はあるが、しかし、それはこれらが結局のところ、テクスト的であるという条件においてである。例えば、メッセージ、コミュニケーション、情報は、それ自身、メッセージ、情報、コミュニケーションの秩序に属さない、つまり、それ自体、痕跡あるいはグラムでないようないかなる内容も決して伝えない〔transmit〕(送信せず〔emit〕、伝達せず〔communicate〕、知らせない〔inform〕) のである。情報、コミュニケーション、メッセージは何か (それ自身はまだメッセージでもコミュニケーションでも情報でもない何か) を知らせるわけでも、伝達するわけでも、送信するわけでもない。メッセージはメッセージを送信する。それは同語反復のようにみえるが、実際、常識にとって明白にみえることとは反対なのである。メッセージは何かを送信するわけではなく、何も言わないし、何も伝達しない。メッセージが送信するものは、メッセージと同じ構造をもっており、それは例えば、一つのメッセージなのだ。また、送られたメッセージこそが、メッセージを送信することの解読と翻訳を可能にするのである。このメッセージを送信することは、メッセージ、情報、コミュニケーションの外部のあらゆるものの不在を含意する。こういうわけで、私たちは以下のことについてはっきりさせておかなければならない。つまり、通常、コミュニケーション、情報、メッセージは誰かが思考するように導くということ、つまり、何かを伝達し、送信し、知らせるということとは裏腹に、

コミュニケーション、情報、メッセージという語はテクスト内にあり、テクストという条件で機能するのである。

当然、このテクスト的な自己参照、テクストしか参照しないテクストが自らへと閉じていることは、同語反復的あるいは自閉的な状態とはまったく関係ない。その反対である。他性がここでは還元不可能であるからこそ、テクストだけがあるのだ。語も要素もここではいかなる自己充足もしない、またさらには、他者を参照せず、決してそれ自身を参照しないようないかなる効果ももたないからこそ、テクストだけがあるのだ。そして、テクストと呼ばれる集合がそれ自身に閉じることができないからこそ、テクストだけがあり、また、いわゆる「一般的」テクスト〔“general” text〕（明らかに危険でたんに論争的な表現である）は集合でも全体性でもないのだ。それはそれ自身を把握できないし、把握されえない。しかし、それは書かれ、読まれることができる、何か別のものであるのだ[29]。

したがって、自己の差異的反覆を生物の生命の起源と意味として理解し、そして、反覆可能な痕跡の可能性をその還元不可能な条件として理解しなければならない。原－エクリチュールのシステムとして、織物――諸痕跡の跡――の把持と洗練と予示として、いわば、一つのテクストとして、生物が自らを構造化することを認めなければならないのだ。

それゆえ、生物の論理とは『グラマトロジーについて』において洗練された「一般的テクスト」の論理である。「テクストの外部はない」〔*Il n’ y a pas de hors-texte*〕[30]という有名なテーゼから方向付けられた諸々の誤解を「一般的テクスト」の概念から一掃できるのは、ただこのような観点からのみなのである。

私たちはここで、解釈学の存在論的な過激化によって定式化されたテーゼに向き合っているのではない。デリダはハイデガーとガダマーにつづいて、一冊の本として書かれていることのみが理解されうるとも、また、何よりもまず私たちは一冊の

---

[29] Jacques Derrida, unpublished seminar, *La vie la mort*, Archive-Derrida, IMEC, DRR 173, session 6, p. 2. 以下、LVMと略記。

[30] 〔訳注〕DG, p. 227/OG, p. 158.〔『根源の彼方に――グラマトロジーについて』前掲下巻、36頁〕

本を解釈するようにあらゆるものを解釈するのだ、とも述べているわけではまったくではない。むしろ、痕跡は生物の可能性の条件だということを述べているのである。すなわち、可能性の条件として、痕跡は一つのテクストとして生物の生命を構造化する。生物学的組織化から、文化的環境のなかで人間によって書かれた諸テクストにいたるまで、そして――私たちがみてきたように、この進化論的移行は決定的なのだが――、生存法則に応答しつつ環境の中で生物の諸関係を規定する動物的な原－エクリチュールを通じて、そうしたテクストとして構造化するのである。

したがって、その条件はつねに同じものであるが、あらゆる段階で、テクストの洗練化は異なっている。解読のプログラムとコードは、人間の準－自由へ向かう複雑性と柔軟性という観点から進化する。これは生存の必然性に応じるためだが、これらの必然性は細胞から社会的生、科学的知の領域にいたるまできわめて異なっている。

> 多かれ少なかれ素朴な仕方で、文献学、文芸批評、ドキュメントとアーカイヴの科学、等々といった限定的な条件、すなわち、私たちが「テクスト」という名で呼び、知っていると思っている何かを究極的な参照としている限定的な条件とおそらくみなされてきたもの――このような条件はいまや遺伝学あるいは生命科学一般の条件である。そして、もし生命科学が数ある科学のうちの一つではなく、生きものを巻き込む諸領域（精神分析、歴史、社会学――すべての人間科学、しかしまた、生きものの活動に関係する限りでのすべての科学――つまり、すべての科学、すべての言説、生産一般）[31]において、その対象を規定するすべての学によって含意される科学であるとしよう。そして、もし生命科学が数ある科学のうちの一つでないならば、そのとき、そのテクスト化、その対象や主題のテクスト化はその外部に何ものも残さない。多かれ少なかれ素朴な関心から、あるいは関心を惹く素朴さから主張されるかもしれないが、あきらかにこのことから、あらゆるものがこのテクスト化の効果を通じて、本やメモ帳、ある程度特殊な図書館の居心地の良い内部に還元されるということにはならない。逆に、あらゆるものが内部と外部の境界のきわめて暴力的な再

[31] 〔訳注〕原文では括弧は閉じられていないが、訳者の判断で付加した。

解釈へと導かれていくのである[32]。

これらの議論の含意は、私からすれば、デリダの仕事、脱構築の意味そのものの解釈にとって計算不可能なものであるように思われる。少なくとも、注意が必要だし、そしてもちろん、厳密で注意深い作業、わたしがここで素描を試みているたんにもっとも一般的な座標軸が必要となる。さしあたり結論づけるために、もう一度、「生死」講義からさらにある一節を思い出してもらう必要があるように思われる。おそらく無駄かもしれないが、ニヒリズムとの疑わしい――そしてつねにたんに疑わしいだけの――つながりからデリダをきっぱりと自由にすることを願ってのことである。この一節のなかで、デリダは自分の議論から、関連の大きい最初の含意を引き出している。一度、生物の生命のテクスト的構造が確立されれば、一般的な認識論的原理を演繹することは、必然ではないとしても、可能なのである。すなわち、生物が一つのテクストであり、その環境との関係において生存するために諸々のテクストを生産しているのならば、そのとき、その諸条件と諸構造をテクストの用語で再考すべきではあるものの、私たちは科学的知識の可能性を正統化することができるのである。

> こうした状況――テクストを再標記するテクスト以外には何も参照しないがゆえに、外在的な参照をもたず、すべてが外部にある一つのテクスト――は、究極的には、生物遺伝学のテクストの状況ではないのだろうか。テクストがテクストの一部を形成したり、テクストがテクストの産物であったり、ある対象や指示対象について何かを書くようなテクストの状況ではないのだろうか。ある対象や指示対象と言っても、それらはたんにすでにテクストであるのではなく、それなしでは科学的テクスト――それ自体が生きものの産物だ――が書かれえないようなテクストである。科学的テクストはもちろんジャコブが記述した状況の中にあり、彼の対象、すなわち生きている細胞の中にある。彼は、遺伝的メッセージの翻訳の産物のような遺伝的メッセージの翻訳者の一人だった。科学者や科学の活動、遺伝科学の総体というテクストはその対象の産物と

[32] LVM, s. 4, p. 1.

して規定される。こう言った方がよければ、彼らが研究している生命の産物として、彼らが翻訳したり解読したりしている、あるいはその解読の手続きを解読している最中のテクストのテクスト的産物として規定されるのだ。そして、これは――メッセージはその翻訳の産物そのものによって翻訳されるしかないという構造的な法則によれば――客観性の限界にみえるのだが、このことは、この領域において、科学の、そしてすべての学を実現するための科学性の条件でもあるのだ。この条件においてこそ、翻訳や解読（この語の古典的な意味において客観的でも、主観的でも、意味の解釈学でも真理の開示でもない解読）、つまり、テクスト内的な解読が、外部テクスト的な参照のないこのテクスト的科学において可能になるのである[33]。

〔著者紹介〕

フランチェスコ・ヴィターレ（Francesco Vitale）氏はイタリアのサレルノ大学准教授で、ジャック・デリダの研究者。デリダ論として、*Spettrografie. Jacques Derrida tra singolarità e scrittura,* Il nuovo Melangolo, 2008, *Mitografie. Jacques Derrida e la scrittura dello spazio,* Mimesis, 2012などを刊行している。ヴィターレ氏が精力的にとり組んでいるのは、デリダの1974-75年の未公刊講義「生死」（*La vie la mort*）である。デリダは晩年、動物－生政治論の考察に向かったが、その発端のひとつはこの「生死」講義にある。分子生物学者フランソワ・ジャコブの『生物の論理』（1970年）を参照しつつ、デリダは遺伝子（痕跡とテクストの隠喩）に書き込まれた「非音声的エクリチュール」に即して「再生産」や「プログラム」を論じた。「生死」講義における生物のテクスト的な解釈から、初期デリダにさかのぼり、差延や原エクリチュール、痕跡、一般テクスト（「テクストに外はない」）といった諸観念の構造が直接的ないし間接的に解明されるという。ヴィターレ氏は生物学を援用しつつ展開されるデリダの行論を、フーコーの「生－権力（bio-pouvoir）」を踏まえつつ、「生－脱構築（biodeconstruction）」と名づける。「生死」講義はヴィターレ氏の編纂で刊行準備が進んでいると聞くが、その草稿の引用を含む本稿は最新のデリダ研究の一端を伝える点で味読に値する論考である。

---

[33] LVM, s. 6, p. 4.

Francesco Vitale, “The Text and the Living: Jacques Derrida between Biology and Deconstruction”, in *Oxford Literary Review*, Volume 36, Issue 1, pp. 95–114.
Reprinted by permission of Francesco Vitale
訳＝西山雄二（首都大学東京准教授）、小川歩人（大阪大学・修士課程）